単元の言語活動４　漢詩漢文の表現の特徴をつかむ

活動のねらい

単元のねらいとした漢詩文の表現に対する理解を生徒自身の感覚と思考によって確認するための活動である。

まず、漢詩・漢文らしいと感じる表現を選択する作業を通じて、漢詩漢文らしい表現とは何だろうかという問いを意識させる。この問いは、生徒自身の言語感覚を活性化することにもつながり、グループでの議論も有効である。

さらに、それが日本語の世界とどのようにかかわるかを探究させることで、古文や現代文の学習と関連させ、言語文化という科目全体の学習意義についても確認する機会とする。

タイトル・序文の解説

日本の言語文化は、和と漢の二つの流れによって、その豊かさが育まれてきた。言語活動のこの序文は、生徒自身の言語感覚に即して漢詩文の表現の特徴をつかむにあたって、言語文化の学習における位置づけを確認するためのものである。

漢文訓読と日本語との関係については、山田孝雄『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』（宝文館、一九三五）以来、日本語史上の常識であるし、近代日本語文が成立するにあたって漢文訓読体が規範となったことも、広く認識されている。また、『古事記』『日本書紀』『懐風藻』『万葉集』から『源氏物語』、松尾芭蕉、漱石・鷗外にいたるまで、日本文学において漢詩文が果たした役割の大きさについても同様であろう。そうした「漢」の存在を常に意識せざるをえなかったために、それと拮抗する「和」の価値への志向が生じ、日本の伝統意識の核となった。

ここでは、そうした学術的な事実を一方的に説明するのではなく、対句や反語など、生徒にも漢文らしさを身近に感じられる例から、日本の言語文化全体への視野が得られるように工夫したい。

「課題」の解説

課題　漢詩や漢文の表現方法にはどのような特徴があるか、和歌や俳句、さらに現代日本語の文章などと比較してまとめ、発表してみよう（次の1・2・3は、1と3、2と3のように分担してもよい）。

漢詩文の表現の特徴とは何か、漢詩文らしさとは何かという問いは、それだけでは漠然としている。和歌や俳句（もちろん物語などを含めてもよい）、さらに現代日本語文まで、これまでの言語文化の学習を生かして比較対照させることで、問いの輪郭をはっきりさせ、課題に取り組みやすいようにした。

活動の解説

1 漢詩らしい表現の特徴について考えてみよう。

①この単元の漢詩から、漢詩らしいと感じられる句もしく聯を一つ選ぶ。

深く考えずに感覚的に選ばせるほうがよい。そこから、なぜそれを漢詩らしいと感じたのかという生徒自身の言語感覚への問いが生まれることを重視したい。

漢詩らしさには、もともとの漢詩の表現に由来するものと、訓読に由来するものとの両面が存在するが、区別せずに取り上げてよい。

解答には、いろいろなパターンがありえる。例えば「国破山河在」を挙げて、「山河」に雄大さを感じるのが漢詩らしいから、という答えもあるだろうし、「酔臥沙場君莫笑」を挙げて、「笑うことなかれ」が漢詩らしいから、という答えもあるだろう。

②選ばれた句（聯）について、なぜ漢詩らしいと感じられるのか、この教科書に掲載されている和歌と比較しながら発表し、話し合う。 知技(2)ア・イ・ウ

和歌との比較は、具体的な和歌の表現を取り上げて細かく対照させてもよいし、和歌全体と比較した上で、何首か例示する形式でもよい。比較する和歌を選ぶには、「春」「秋」、「花」「月」「富士山」、また「送別」「望郷」など、背景・対象・主題などを同じくするもの同士が取り組みやすいことを示唆するのも有効であろう。また、単純に和文と訓読体の文法的違い（係り結びの有無、否定形の違いなど）を指摘することもあってよい。

【評価】和歌と比較しながら、漢詩らしい表現の特徴について考えているか、発言や行動を観察する。

2 漢文特有の言い回しや比喩の特徴について考えてみよう。

①この単元の漢文から、漢文らしいと思われる言い回しや比喩を一つ選ぶ。

「雑説」の末尾の文や「春夜宴桃李園序」の冒頭の比喩などが目にとまりやすい例であろう

②選ばれた言い回しや比喩の中に現代日本語の実用文や論説文に取り込まれているものがあるか、話し合う。 知技(2)ア・イ・ウ

「雑説」の例であれば、「名馬がいないのか、それとも名馬を見る目がないのか」のような修辞的選択疑問文の例を探しつつ、「嗚呼」などの感動詞は現代日本語の論説文ではあまり使われないことに注意を向けることになるであろうし、「春夜宴桃李園序」の例であれば、比喩表現を対で用いている例を探すことになる。いずれにしても、多くの文章から適切な比較例を探すことになるので、グループで作業するほうが取組みやすい。

【評価】漢文特有の言い回しや比喩について、現代日本語に取り込まれているものがあるか考えているか、発言や行動を観察する。

3 漢詩や漢文の表現方法が日本語・日本文学にどのように生かされているか、あるいはどのように異なっているか、この教科書掲載の漢詩の和訳（一四八ページ・一五〇ページ）も参考にして、まとめて発表してみよう。 知技(1)ア、思判表(1)ウ・エ 主態

①生かされている点と異なっている点について、一つずつ例をあげる。

生かされている点の例として、主題や発想の継承を挙げるのは比較的容易かと思われる。異なっている点については、対句を崩したり、否定形を肯定形に変えたり（不須辞→ツガセテオクレ）などが気づきやすい。

②あげられた例を分類して、漢詩や漢文の表現の特徴について、図表にしてまとめ、発表する。

生徒の自由な発想に委ねてよいところだが、例えば助字や疑問詞の効果的な使用、「葡萄美酒夜光杯」のような名詞のみの句の挿入、対句表現の多用、「千里」「千山」「万径」「万金」「三五夜」「二千里」などの数量表現の効果的使用など、語法面での特徴をまとめるのが、これまでの復習としても取組みやすい。

また、内容面からは、例えば友情表現の多さを指摘することも想定されるが、そこから漢詩文の担い手が士人（男性知識人）階層であったことなどを指導者が示唆するなど（「古典に関する文章」内に示唆がある）、作者や読者がどのような社会的位置にいるかということと表現の特徴とに関連性があることの理解への導入としてもよい。

【評価】 漢詩文の表現の特徴と、それが日本語とどのようにかかわるかを理解しているか、行動を点検したり、言語活動ワークシートの記述を確認したり、振り返りシートの記述を分析したりする。

（齋藤希史）